

多剤耐性結核患者の治療の転帰について

この度、公益財団法人結核予防会結核研究所 臨床疫学部河津里沙主任らは、結核登録者情報システムから本邦において2011年から2013年に多剤耐性結核として新登録された患者の治療状況を追跡し、治療の転帰や治療期間などを分析しました。調査期間中に新登録された多剤耐性結核患者172人中、98人の治療終了理由が「治療完了」と入力されており、これを基に算出した治療完了率は57.0%、しかし64歳以下に限定すると治療完了率は71.6%であったことを報告しました。一方で、治療終了理由が「治療完了」だった者の29.2%は治療期間が540日に達していないことなどもわかりました。

本研究は2018年8月31日に国際学術誌“BMC Infectious Diseases”にオンライン掲載されました。いかに論文の概要を簡単に記載しますが、図表も含めて情報をご利用の際は出典を次の通り明記してください：

Kawatsu L, Uchimura K, Izumi K, Ohkado A, Yoshiyama T. Treatment outcome of multidrug-resistant tuberculosis in Japan - the first cross-sectional study of Japan tuberculosis surveillance data. BMC Infectious Diseases. 2018. 18:445.

<https://doi.org/10.1186/s12879-018-3353-9>

尚、図表に用いた全ての元データは下記にて公開しています。

<https://bmcinfectdis.biomedcentral.com/articles/10.1186/s12879-018-3353-9>

目的と方法：これまで結核登録者情報システム（以下、結核サーベイランス）は標準治療が行われた肺結核患者の治療成績のみを治療開始後12か月時点で自動判定によって評価しており、多剤耐性結核患者の治療の転帰は把握されていなかった。本研究は結核サーベイランスにおける新登録データから2011年～2013年の間に多剤耐性結核と新登録された患者を抽出し、患者番号を用いてその後の年度末データと突合し、年度末データにおける「治療終了理由」を確認することで治療の転帰の把握を試みた。

結果：2011年～2013年の間に結核サーベイランスにおいて多剤耐性結核と登録された患者は172人（男性68.6%、日本生まれ70.9%、初回治療65.1%）。しかし3年間で15-64歳、外国生まれの及び初回治療者の割合は増加傾向にあった。172人中、治療終了理由が「治療完了」だった者は57.0% (98/172)、治療を中止していた者は5.8% (10/172)、死亡していた者は24.4% (42/172)、転帰が不明だったものは9.9% (17/172)であった。「治療完了率」は65歳以上と比較すると15-64歳で優位に高かった (71.6% vs 39.0%, $p < 0.001$)。日本生まれの方が死亡割合が高く (31.1% vs 2.3%)、外国生まれの方が転出割合が高かった (0.0%

2018年10月30日

vs 39.5%)。また、治療完了していた98人中、治療期間(日数)が把握されていたのは96人であった。平均治療期間は713.2日で、24から30か月で治療を終了していた者が多かったが、12か月前後で治療を終了していた者も認められた。96人中、28人(29.2%)の治療日数が540日に達していなかった。

結論:若年者、初回治療者の割合が増加傾向にあり、新規感染による多剤耐性結核の拡大が懸念され、確実な治療は勿論、早期診断・早期発見の重要性が示唆された。64歳以下の治療完了率は欧米諸国と同様であったが、一方で治療日数が適切ではない可能性がある患者が認められた。全数調査が求められる。

【本資料及び論文に関するお問い合わせ先】

公益財団法人結核予防会結核研究所 臨床疫学部

河津里沙

Tel: 042-493-5711

Fax: 042-493-5529

Email: kawatsu@jata.or.jp